



TITLE:

<批評・紹介> 多田等観著「チベット」(岩波新書91)

AUTHOR(S):

佐藤, 長

CITATION:

佐藤, 長. <批評・紹介> 多田等観著「チベット」(岩波新書91). 東洋史研究 1942, 7(2-3): 178-181

ISSUE DATE:

1942-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/138828>

RIGHT:

チベツト

岩波新書 91

多田等 觀著

昭和十七年四月十七日 岩波書店發行
一七五頁地圖一葉附 定價五十錢

チベツト事情の案内書として名著の譽高き「西藏過去及び現在」に於て、チャールス・ベルは特に「日本とロシア」なる一章を割き興味深い日藏關係を記して居る。中で最も我々が注意を惹かれるのは次の一節である。

〔河口師以後〕拉薩に入りこんだ日本人は公然と居を構へて

居た。その中の一名は西藏政府に聘せられて軍隊の訓練に當つた。私(ベル)が拉薩に居た頃には色拉寺に一名の日本人が居た。この人は刻苦勉強して日本佛典と西藏佛典との比較研究に没頭し已に八年の歳月を閲してゐたのであつた。寺院の薄暗い室に西藏文を久しきに亘つて研究してゐたためでもあらうか。ひどく視力を損つてゐたが、幸にケネディ大佐の醫療をうける事が出来たのである。(田中一呂氏邦譯より)

河口師のことは餘りにも世に知れたつて居る。西藏政府に聘せられた軍事教官が矢島保次郎氏なる事も疑ない。しからばこのセラ寺院で刻苦勉強して當時既に八年の歳月を送つて居た日本僧は一體誰なのであらうか。ベル自身もその名を記さないし、田中氏も何等これに註する所がない。ベルは一九二〇年(大正九年)に入藏しラツサに十一ヶ月滞在した。大正九年といへばラツサには既に河口、青木、矢島の諸氏は去つて多田師より他は留つて居ない。これが確實に多田師であらうとはかねてからの推察であつたが後日師に直接お訊ねしたところが師は詳細にわたつて當時の模様を追憶せられこの推測を肯定せられたのである。荒涼たる西藏高原を背景に輝比する白聖の寺館、その中の薄暗い一室に孜々として西藏佛典を一枚々々繙く學僧、今は全く隔絶された世界にたゞ一人の日本僧として衰へたる視力に憫みながら習學に勉める。誰かこの一文を讀んで凄壯

の感なきを得よう。しかもこの研究生生活は更に大正十二年の春まで繼續せられたのである。此處に紹介せんとする「チベット」といふのはかゝる著者によつて著はされたものなることを先づ銘記せなければならぬ。祕密の國西藏に入り得たものは東西を合しても尙數多くはない。それは單に西藏人が外國人を拒否すると云ふばかりではない。西藏の自然が又尋常の人間の入藏を許さぬのである。若し我々が河口師や青木師の旅行記を讀むならば如何に此等の諸師が言語に絶する潜入ふりを行つて居るかを知らう。兩師は共にネパールの間道を傳つて西藏入をせられた。しかし多田師の場合は此以上の苦心が拂はれて居る。師の入藏はブータン側から行はれた。ブータン、カムは名にし負ふ殺人と強盜の本場であつて入西藏路の中最も困難を極めたものである。時は正に炎熱の頃である。しかも青木師の入藏が成功した爲に多田師の身邊は英國官憲によつて實に嚴重に警戒せられて居た。かゝる人間と自然と兩方面の妨害を突破して師は終に首都ラツサへと到達することが出来たのである。西藏には入り得てもラツサに入り得るものは更に數が少くなる。その數少い中に黃帽派喇嘛教の大本山に籍をおき十二年の長きにわたつてオーソドックスの喇嘛教を研學したのは多田師より他絶えて無いであらう。東北帝大を訪れた歐洲の諸碩學は多田師將來の膨大なる西藏文獻に啞然とするが更に多田師其の人の

實在に膽をつぶすといふ。まことに當然すぎる程當然であらう。前置が大分長くなつたが著書を紹介するには著者を先づ紹介する必要あり、此の場合には特にその必要を痛感せしめられるからである。

さて多田師は實際今まで旅行記といふものを出されなかつたし、成書が一冊もなかつた關係からして餘り一般には知られなかつた。しかし師の喇嘛教に關するその廣大な知識は一部識者の間では高く評價されて居た。今回師の著された「チベット」を讀むにそれは全く他の類書と撰を異にする事が感ぜられる。本書の内容はラマ教概観、西藏の自然と人文、西藏の政府と政治、ラマ教の歴史の四章に分れ各々又細目に分たれて記述せられて居る。就中最も注意すべきは第一章のラマ教概観であつて先づラマの語義について述べるがそれは今までの單純な説明や受賣を一蹴するに足る。師によればラマは語義的には「上人」であるが又はグル（師匠）乃至はカールヤナミトラ（善知識）の意味が存在し、こゝにグルとしてのラマを解釋して居る。即ち如何なる佛の教説もすべてグルによつて與へられるが故にグルとしてのラマはラマ教徒にとつて最も重要なものだといふ。

結局ラマ教の世界はこのラマを媒介として一切が成立することになる。かくしてグルとしてのラマは遂には絶對界にまでのぼり無上の理想を表現せるものと考へられる。故に西藏でラマと

いふ時にはかなり廣く意味が用ひられる。化身ラマの思想も結局その一つである。師は此處で祕密タントラの觀法からラマの化身轉生を語りダライ、パンチエンの二大喇嘛の説明を與へられて居る。此等の解釋の一部は先に師が「喇嘛教の倫理觀」〔岩波「倫理學」〕に於て述べられた所であるが根本的には從來全く知られなかつた點で師の深遠な研究のみが語り得る喇嘛教の重要な特徴の一つであらう。

第二節に於ては「ラマの教團」と題し主として黃帽派を中心に本山とタントラ學院、寺院組織、僧侶の生活狀態、研究方法等が述べられて居るが、この節は次の第三節「ラマ教の儀禮」第四節「ラマ教の教義」と共に本書中最大出色の文字である。

喇嘛教は一般に密教と考へられて居るが黃帽派に於ては各本山に於て顯教を修行と併行して習學し、これらの研究が終つてはじめて密教のタントラ學院に入る。顯密の兼習はアティシヤ以來の喇嘛教の傳統ではあるが、かく明確に顯教の必習を規定したのはツォンカワであつて、その教へは脈々として現在も傳へられ守られて居るのである。その研學次第も師によつてこの節の中に詳細に述べられて居る。又論議は喇嘛教の習學法として通常學部のある喇嘛寺院では行はれて居るけれども、その具體的方法、例へば最初の習學の三年間に因明を學び續いて般若、中觀、小乘律、俱舍等を各々數年づゝ費して學んで行く。其等

のことについて詳細に記してあるのもこの書だけであつて、これも充分注意されてよい。要するに此の二三節のところは師の如く大本山で正統の學問をした人にしてはじめて語り得ることなのであつて到底他の何人の追隨を許さない獨壇場である。ラマの修行僧が生きながら洞窟に埋められる話はスグエン・ヘデイン等によつて度々傳へられて、我々はその印度的苦行に目を瞠つたのであるが、かゝる原始的教團の精神は師の記述により尙喇嘛教團の隨所に窺ひ得るやうである。印度正統の聖典を保持し純粹なる原始教團の生活意識が未だ残つて居るならば一部に淺薄な墮落の聲が聞えるにかゝはらず喇嘛教は尙將來に多くの希望をつなぐものであらう。

さて第二第三章は共に西藏の俗界の現勢に關するものであるがこれも一般の旅行者の記録とは異り特に行政組織の所等は我々の手近ではこれ程明確な記述は一寸見あたらない。尤もベルの著書には此の點詳しいものがあるが本書の方がずっと要領を得て書かれて居る。

第四章のラマ教の歴史については特に言ふべきものはないが近世の部に至つて西藏史料の片鱗が窺はれ、西藏史研究の一つの方法を暗示して居る。第十三世ダライの事は流石にかなり詳しく、著者のダライ宮廷における殊遇をも窺はれて面白い。因にベルの「西藏の喇嘛教」(橋本氏邦譯三五七頁)を見ると、多

田師は西藏史料としてターラナータにプトンとテブゴンと同等の價值を認めたと書いて居るが自分が多田師から直接聞いた所によるとプトンが絶對第一でテブゴンそれに次ぎターラナータはかなりおちると云ふ。師の本書における叙述が右の方法によつてゐることは勿論である。

尙本書には卷末に地圖が一葉附されて居る。著者自身が書かれたものと見え、かなり讀みにくく一二の誤も見られるが、自分の知るところでは日本字で書きこんである西藏地圖ははじめてのやうなので興味をひかれた。

以上を以て本書の紹介を終るが非才の身を以て反つて本書の眞價を傳へ得ないかを恐れて居る。近來僅か數年間の經驗を以て書かれた時局的書籍は特に多く本書の如きもそれ等に取圍まれて出版はされて居るが實は十數年にわたる實地研究と、しかも尙その繼續せる研究とを集約して成つたもので時局下特に群鶏の一鶴の感を深くせしめられる。小冊子ではあり、題も又ありふれては居るのであるが、この書の内容は決してさやうな簡單なものではない。從來西藏に關する著述といへば單なる旅行記か或は史料を充分に批判しないもの或はそれの所謂二番手であつて中には甚だその信憑性の缺けて居るものもないではなかつたが本書にはかゝる曖昧さが一切ない。それだけでも充分に好感を持つことが出来る。切に一般讀者の緒言を薦めるもので

ある。

もとより多田師の學問は到底かゝる小冊子には盛り得ないものであつて、それについてはいづれ又他日を期さねばなるまい。師の膨大なる體系が一日も早く顯示せられんことを待望して此の亂雜なる紹介の筆を擱く次第である。(佐藤長)